

# 英英辞典を活用した英語学習指導について

Utilizing English-English Dictionaries in EFL Instruction

有 吉 淳一郎

# 英英辞典を活用した英語学習指導について

有吉 淳一郎

## 1. はじめに

従来の紙媒体の辞書に代わり、現在では電子辞書（携帯式電子辞書、オンライン辞書、CD-ROM辞書など）が広く普及している。紙の辞書はかさばるし重い。その点、電子辞書の手軽さは大変魅力的である。事実、大学の授業においてもスマートフォンでオンライン辞書を利用している学生を多く見かける。このように電子辞書が身近に、そして手軽に利用されるようになったことに伴い、英和辞典、和英辞典とも、利用される割合が増えているのではないだろうか。

では、英英辞典についてはどうであろうか。学生は以前よりも用いるようになってきているのであろうか。

知らない英単語の意味を調べるために英和辞典を引き、ある日本語について英語ではどのように表現されるのかを調べるために和英辞典を引く—英和辞典と和英辞典といえば、このような用いられ方が一般的であろう。学生からすると、英語との実際的な関わりにおいては、そもそも英和辞典と和英辞典を参照すれば事足りることが多く、英英辞典に関しては特段必要性が感じられない—これが正直なところではないだろうか。

また、当然ながら、英英辞典の記述はすべて英語でなされている。単語の意味を調べようと思ってせっかく引いても、そこにある説明が英語で書かれていては、内容を読み取るのが大変である。さらに場合によっては、意味を知らない単語が新たに出てくるかもしれない。そうすると今度は英和辞典を引く必要に迫られてしまう。これでは手間であり、引く気が失せてしまう。こういった理由から英英辞典の使用が敬遠されるといったケースも少なくないであろう。

しかしながら、である。英英辞典は、その見出し語の定義の特徴を考えた場合、学生の英語学習効果を高めるツールとして、非常に高い有用性を備えている。本稿ではこの点に着目し、英英辞典ならではの特徴を活かした英語学習指導につい

て、英語学習者向け英英辞典を利用した観点から論じる。以下、2節ではまず、英英辞典における定義の記述について、種々の辞典を参照、比較対照した上で、英語学習者向け英英辞典の特徴について概観する。3節以降では、英語学習者向け英英辞典を活用した英語学習指導について、その具体的方法を提示し考察を進めていく。5節はまとめである。

## 2. 英語学習者向け英英辞典とは

英語学習者向け英英辞典の特徴を概観するにあたり、英英辞典における定義の記述を具体的に見ながら確認をしておきたい。

一口に英英辞典と言っても多種多様ではあるが、英語話者向けのものと同語学習者向けのものの2種類に大別される。以下にそのいくつかを挙げる。

### (1) 英語話者向け:

Collins English Dictionary 9th edition (CED<sup>9</sup>)

Oxford Dictionary of English 2nd edition, revised (ODE<sup>2</sup>, revised)

The New Oxford American Dictionary 2nd edition (NOAD<sup>2</sup>)

### 英語学習者向け:

Longman Dictionary of Contemporary English 6th edition (LDOCE<sup>6</sup>)

Macmillan English Dictionary for Advanced Learners 2nd edition (MED<sup>2</sup>)

Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary (MWALED)

Oxford Advanced Learner's Dictionary 9th edition (OALD<sup>9</sup>)

英語話者向けにせよ英語学習者向けにせよ、どちらも英英辞典であるのだから、単語を引けば英語で意味が書かれているのだし大差はないだろう—このように思われるかもしれないが、実のところ両者はかなり異なる。以下ではこの点について

て、基本的な語彙であるdogの定義を参考に、英語話者向け英英辞典と英語学習者向け英英辞典とを比較対照してみる。

まずは英語話者向け英英辞典における記述であるが、例えば以下のとおりである。

- (2) a. a domesticated canine mammal, *Canis familiaris*, occurring in many breeds that show a great variety in size and form (CED<sup>9</sup>)
- b. a domesticated carnivorous mammal that typically has a long snout, an acute sense of smell, and a barking, howling, or whining voice. It is widely kept as a pet or for work or field sports. (NOAD<sup>2</sup>)

いずれにおいても難解な語彙が含まれており、内容をきちんと理解するには、さらに辞書を引かなければならないだろう。単語の意味を知りたくて辞書を引いたものの、今度はそこに新たな意味の分からない語が出現してしまう—このようなパターンに見舞われてしまうのである。

英語話者向け英英辞典の記述に対し、英語学習者向け英英辞典における記述は以下のとおりである。

- (3) a. a common animal with four legs, fur, and a tail. Dogs are kept as pets or trained to guard places, find drugs etc. (LDOCE<sup>6</sup>)
- b. an animal kept as a pet, for guarding buildings, or for hunting. A young dog is called a puppy (MED<sup>2</sup>)
- c. an animal with four legs and a tail, often kept as a pet or trained for work, for example hunting or guarding buildings. There are many types of dog, some of which are wild. (OALD<sup>9</sup>)

どうであろうか。最初に見た英語話者向けのもの比べると、ずいぶんと平易で読みやすいといった印象を受けるのではないだろうか。同じ英英辞典であるにも

関わらず、このように違うのはなぜか。

実はこれは、英語学習者向け英英辞典では、見出し語の定義に用いられる語が、基礎的な語彙に制限されているためである。例えばLDOCEでは2000語が、同様にOALDでは3000語が定義語彙として使用されている。このように英語学習者向けの英英辞典では、単語の意味を調べた際に、そこに再度未知の語が出てくるといった悪循環を避けるための工夫がなされているのである。

以上、英語学習者向け英英辞典の特徴を概観したところで、以下では同辞典を活用した英語学習指導について具体例を提示、考察を進めていくこととする。

### 3. 語彙力アップに向けて

本節では、磐崎（2011）による英英辞典の「スキマ引き」と呼ばれる手法を利用した、語彙力アップのための英語学習指導の具体例を提示する。ここでいう「スキマ」とは、時間の「隙間」と、事物の背景知識を意味する「スキーマ（schema）」を掛けた磐崎の造語である。通例は単語の意味が分からないから辞書を引き、書かれてある定義を読み、そして意味を知るに至るわけであるが、スキマ引きでは逆転の発想、すなわち、すでに意味を知っている語を引き、そして定義を読むというプロセスを経る。磐崎はこのスキマ引きにより、定義中の知らない語の意味を推測することが可能になると言う。

以下をご覧ください。ある見出し語の定義である。

(4) an insect belonging to the beetle family that glows in the dark

(磐崎 2011: 99)

下線部glowはどのような意味であるか—定義中の他の単語の意味を考え合わせても、学生にはなかなか分からないかもしれない。しかしながら仮にそのような場合であっても、以下のように、この定義の見出し語がfireflyであり、その意味がホタルであるということが示されると状況は一変し、glowの意味は「光る」なのでは、と察しがつくようになるのではないだろうか。

- (5) firefly (ホタル): an insect belonging to the beetle family that glows in the dark

(磐崎 2011: 100)

このように、見出し語とその意味が示されると、定義中の語の意味が推測されるようになるわけであるが、これはなぜであろうか。磐崎は、その理由は、見出し語の背景知識が活性化するためである、とする。上述の例でいうと、(4) では glow の意味を考えても、「?」となるかもしれない。虫が暗闇の中で行うことにはいろいろなことがありうる。しかし、見出し語が firefly 「ホタル」だと分かると、glow の意味を推測するにあたり、ホタルに関する背景知識が活性化され、その内容と照らし合わせながら定義を読んでいくことによって、「ああ、この単語の意味は、光るだ!」という「気づき」を体験するのである。英英辞典を用いたスキマ引きについて、このように気づきを伴うという点が、英単語帳などでただひたすらに単語の意味を暗記するのとは決定的に異なる重要な点である。学びのプロセスにおいて、気づきという体験を経ることによって記憶が定着しやすくなり、その学習効果が高まるであろうことは言うまでもないであろう。

そこで以下では上掲の例を参考に、英語学習指導の観点から英英辞典を活用したスキマ引きの例を提示していくこととするが、その学習効果をより高めるために以下の2点を併せて提示したい。

- (6) a. 英英辞典で引く対象とする見出し語は、日常的な語彙とする。  
b. 定義中で意味を推測する語—推測語—は、見出し語を定義づける上で特徴的な語とする。

英英辞典で引く語を日常的な語彙にすることによって、そのイメージ・概念が想起されやすくなり、当該語の背景知識が活性化されやすくなる。その上で、推測語を定義で用いられている語の中の特徴的な語にすることによって、学生はより大きな気づきを得られるようになる—このことにより、学生により高い学習効果

をもたらすことが期待されるわけである。

それでは具体例を見ていくこととする。1例目として以下をご覧ください。  
見出し語はmosquitoであり、推測語はsuckである。なお推測語についてはイタリック体で示してある。

(7) mosquito (蚊) : a small flying insect that *sucks* the blood of people and animals, sometimes spreading the disease malaria (LDOCE<sup>6</sup>)

学生はまず、見出し語の部分を目にすることによって、蚊についての背景知識が活性化される。ここで蚊のイメージ・概念が想起されるわけである。蚊といえ、夏になると発生し、プーンという細く高めの不快な音を響かせながら飛んでくる。そして、皮膚を刺し血を吸い、その部分がかゆくて仕方がない—このような感じであろう。

このようなイメージを想起した上で、学生は次に定義へと目を移す。すると、推測語の目的語にbloodが来ていることが分かる。そこで、蚊について想起された内容と照らし合わせることで、suckの意味について、「あ、吸う、なのではないか！」と推測されるに至るわけである。

このように、見出し語に対する知識が活性化された上で、定義中の語の意味を推測するというプロセスは、上述したように、英語学習において非常に有益であろう。例えば「suck=吸う」といったように、単に単語とその意味を対応させて覚えるのではなかなか覚えられず、またせっかく覚えたとしても記憶に定着しない恐れがある。これに対し、スキマ引きを用いた場合は「ああ、分かった！」というように、「気づき」を伴う形で語の意味について学ぶことができる。このことにより、語単独で意味を覚える場合に比べ、より記憶が強固になり学習効果が高まることが期待されるわけである。

引き続き例を挙げていく。以下をご覧ください。

(8) a. bee (ハチ) : a black and yellow flying insect that makes honey and

can *sting* you

- b. kangaroo (カンガルー) : an Australian animal that moves by jumping and carries its babies in a *pouch* (=a special pocket of skin) on its stomach
- c. snail (カタツムリ) : a small soft creature that moves very slowly and has a hard *shell* on its back

(以上、LDOCE<sup>6</sup>)

(8a) のstingに関しては一他の例における推測語も同様ではあるが—単独ではその意味を覚えるのはなかなか難しいだろう。しかしながらここではまず、stingの意味を推測するにあたり、見出し語である「ハチ」の背景知識が活性化される。すなわち、体が黒色で黄色いしま模様があり、ブンブンと音を響かせ飛び回り、怒らせるなど刺激をすると刺され、その場合、赤く腫れ上がり痛みがひどい、といったようなイメージが想起されるわけである。学生はこのような内容と照らし合わせながら定義を読んでいく中で、推測語stingの意味について、「ああ、刺す、ではないか!」と、気づきを伴って推測するに至るであろう。

(8b) については、見出し語が「カンガルー」である。カンガルーといえば、オーストラリアに多く生息し、2本足でピョンピョンと飛び跳ね、お腹のところに袋があって、その中に子供のカンガルーがいて…、といったようなイメージが想起されるのではないだろうか。このような内容と照らし合わせながら、推測語pouch—special pocket「特別なポケット」といった言い換えも見られるが—の意味を推測する。そこで、「ああ、お腹のポケットのことか!」と、学生は気づきを体験するのである。カンガルーの腹部にあるあの袋がpouch—日本語でいうところの、いわゆる「ポーチ」—と呼ばれるということ、これは新鮮な発見なのではないだろうか。

(8c) においても、これまでの例と同様、まず見出し語snailの背景知識が活性化されることにより、カタツムリのイメージが想起される。カタツムリのイメージといえば、背中に渦巻きの形状をした殻を背負っており、ゆっくりゆっくり進



む、といった感じであろう。このようなイメージを頭に描きつつ、定義の内容に目をやる。推測語shellの意味を推測するにあたり、このような段階を経ることによって、この語を知らなくても「ああ、あれか、カタツムリの背中の、あの殻のことか」と、その意味を正しく推測するに至るであろう。仮にshellの意味を知っていたとしても、扇型をした貝殻がイメージされるケースが多いのではないだろうか。上述の定義を見ると、くるくると巻いた巻貝の殻もshellと呼ばれるということが分かる。これもまた英語学習においては新鮮な発見であろう。そしてさらにこの場合、電子辞書であればジャンプ機能を使ってshellを引くことにより、その定義を即座に見ることができる。<sup>1</sup>

- (9) a. the hard outer part that covers and protects an egg, nut, or seed:  
Never buy eggs with cracked shells/peanuts roasted in their shells  
b. the hard protective covering of an animal such as a snail, mussel, or crab: a snail shell/The children were collecting shells on the beach.  
(以上、LDOCE<sup>6</sup>)

卵の殻、また、カニの殻についてもshellと呼ぶということが分かる。簡単にこのような「深追い」ができるのは、電子辞書ならではであろう。

以上、動物を意味する見出し語の例を見てきたが、以下に類例を挙げる。

- (10) a. whale (クジラ) : a very large animal that lives in the sea and looks like a fish, but is actually a *mammal*  
b. elephant (ゾウ) : a very large grey animal with four legs, two *tusks* (=long curved teeth) and a *trunk* (=long nose) that it can use to pick things up  
(以上、LDOCE<sup>6</sup>)

(10a) は見出し語がwhale「クジラ」である。そこで、クジラに関する背景知識

が活性化され、そのイメージが想起される。全長が数十メートルにも及び、灰色をしており、頭頂部から潮を噴きながら悠然と海を泳いでいる—このような姿を頭に思い浮かべながら定義を読んでいく。すると、「…魚のように見えるが、実はmammalである」といったくだりが目に入る。学生はこれまでに、クジラは魚のようであるが実は哺乳類である、また、コウモリは鳥のようであるが実は哺乳類である、といった話を度々耳にしたことがあるのではないだろうか。こういった既知の情報に基づき、推測語mammalに対して「哺乳類、という意味なのではないか」と推測されるに至るわけである。

(10b) では見出し語がelephant「ゾウ」である。定義におけるtuskやtrunkといった語彙は難しいものと思われるが、見出し語によって想起されるイメージ、また定義中の言い換えのおかげもあって、tuskは牙、trunkは鼻を意味することが推測されるであろう。同じ「鼻」であっても、人間のそれがnoseと呼ばれるのに対し、ゾウの場合にはまったく異なることが分かる。このような発見も大変興味深いであろう。

さて、以下ではこれまでとは対照的に、植物を表す見出し語を例に挙げてみる。まずは見出し語がcoconut、推測語がfleshである。

(11) coconut (ココナッツ) : the large brown seed of a tropical tree, which has a hard shell containing white *flesh* that you can eat and a milky liquid that you can drink

(以上、LDOCE<sup>6</sup>)

通例fleshといえば、「人や動物の肉」といった意味が思い浮かぶのではないだろうか。実際、この感覚は正しい。というのも、英英辞典、例えばLDOCE<sup>6</sup>では見出し語の定義が頻度順に記載されているが、そこでfleshを引いてみると、当定義が一番最初に記載されている。人や動物の肉といった意味で最も用いられるわけである。ちなみにその定義は下記のとおりである。

- (12) flesh: the soft part of the body of a person or animal that is between the skin and the bones (LDOCE<sup>6</sup>)

同様のことは、英和辞典でも確認される。例えば『ウィズダム英和4』においても見出し語の語義が頻度順に記載されているが、やはり当語義が一番最初に挙げられている。

しかしながら、(11)におけるfleshは、見出し語であるココナッツのイメージおよびその定義の意味内容から判断して、当然、人や動物の肉ではないということに気づくと同時に、ココナッツのあの白い実の部分、いわゆる「果肉」を指すであろうことが推測されるだろう。日本語でもまさに果肉というように、「肉」という語を用いるわけであるが、英語においても同様に「肉」を意味する語彙が用いられるというのは、なんとも興味深いであろう。

引き続き、植物に関する見出し語をあと2語挙げてみる。

- (13) a. watermelon (スイカ) : a large round fruit with hard green skin, red flesh, and black seeds  
b. cherry (サクランボ) : a small round red or black fruit with a long thin stem and a *stone* in the middle

(以上、LDOCE<sup>6</sup>)

(13a) について、先ほど見た「果肉」を表すfleshがここでも見られるが、ここにおいてもまず、見出し語である「スイカ」のイメージが想起される。スイカといえば、大きく丸い形状で、表皮が硬く、そして、絵を描く時のことを想像すれば分かる通り、その果肉には黒い種が点々とある、といった感じであろう。学生はこのようなイメージを想起することによって、たとえ推測語seedの意味を知らなくても、「ああ、種のことか」と、気づきをもって、その意味を推測するに至るであろう。

(13b) では見出し語はcherry、推測語はstoneである。ここでもまずはサクラ

ンボがイメージされる。光沢があり鮮やかな赤色をした、軸の付いた丸い実が想起されるであろう。このようなイメージを頭に描きつつ、定義中の推測語stoneに目をやる。するとここで学生は、「石？」と思うはずである。stoneといえば石であるし、それ以外に何か意味があるのか、とさえ思うのではないだろうか。しかしながら、「石」では意味的に明らかに変であり、そこで、サクランボのイメージと照らし合わせることによって、「ひょっとしたら、中にある、あの硬い種のことか」と、推測するに至るわけである。「種」、特に「種子」というと専門的な響きがし、ややもすれば難解に聞こえるが、英語では単にstoneといえばよいのである。確かにサクランボの種は石のように硬い。英語ではサクランボの種について、石を意味する語が用いられる—これもまた新鮮な発見なのではないだろうか。

以上、その背景知識が活性化されやすいという観点から、日常的な語彙を見出し語とした例を提示してきたが、日常的な語彙としては、以下の見出し語に代表されるような、日本の食文化に関する語も挙げられるであろう。

- (14) a. tempura (天ぷら) : a type of Japanese food consisting of pieces of vegetables or fish cooked in *batter* (MED<sup>2</sup>)
- b. sushi (寿司) : a Japanese dish of small cakes of cold cooked rice, flavoured with vinegar and served with *raw* fish, etc. on top (OALD<sup>9</sup>)

これらの推測語はどのような意味であるか—特に (14a) のbatterは難易度が高く、単独で示された場合には、高校生はもちろんのこと、大学生でも意味を答えられないケースが多いのではないだろうか。しかしながら、それぞれの語がtempura、sushiの定義中の語であるということが分かると、これまでの例と同様、これらの見出し語のイメージ・概念が想起され、その意味が推測されるのではないだろうか。

(14a) の見出し語はtempura「天ぷら」である。batterは難解であり聞き慣れない語であると思われるわけであるが、天ぷらは、野菜や魚介などの食材に衣を

付けて調理するといったプロセスがイメージされ、このようなイメージと照らし合わせることによって、batterの意味について、「衣では？」と推測されるに至るのではないだろうか。

(14b) は見出し語がsushi、推測語はrawである。寿司といえば、握られた酢飯の上に生の魚の切り身がのっているといったイメージが想起されるだろう。推測語rawのあとに「魚」が来ていることから、rawの意味は「生の」ではないかと推測されるであろう。また、このsushiの定義で用いられている語の中でcakeは大変面白い表現である。「cakeはケーキだろう」と学生は思うであろうが、ここでは「ケーキ」の意ではどう考えてもおかしい。寿司の定義中のcake—この意味がいわゆる「ケーキ」ではないことは明らかである。寿司のイメージから、そして、定義を読み直してみると、冷たいご飯の、といった表現もあることから、ご飯を握って作るあの部分のことで、との推測がなされるであろう。寿司ネタの下の部分がcake—学生にはにわかには信じられないかもしれない。学生にぜひとも英英辞典、英和辞典などでチェックしてほしいところである。新鮮な発見なはずである。

以上、tempura、sushiは、これまでに見てきた他の見出し語と同様に日常語ではあるが、特に日本の食文化に深く根ざした語である。学生は英語学習において、発信力を重視した英語コミュニケーション能力の習得が求められる中、このような語のスキマ引きを通じて、当該語の定義で用いられている未知の語を学ぶと同時に、日本の伝統・文化についての発信力も高められるのではないだろうか。

#### 4. 文化的側面について学ぶ

前節では、すでに意味を知っている語を英英辞典で引くことによって語彙力の増強が可能になることを、その具体例とともに示した。本節では、同様の方法によって英語語彙のもつ文化的側面についての学習が可能になるという、異なる観点を提示してみたい。

まずその1例としてhandkerchiefを挙げてみる。当語は「ハンカチ」として日本語に定着しており、学生にとっても日常的に用いる語であることからイメージ

も想起されやすいであろう。この語を英英辞典で引いてみると、次のような定義が確認される。

- (15) A handkerchief is a small square piece of fabric which you use for blowing your nose. (CCAD)

学生はこの定義の前半部分を目にしたところで、「ああそうそう、小さくて四角い形をしていて、うんうん、ハンカチね」と思うであろう。まさに日本語の「ハンカチ」のイメージである。しかしながら後半部分に目を移すと、you use for blowing your noseとあることに気づく。そう、「鼻をかむために使う」である。日本語話者はハンカチというと、手を洗ったあとに拭いたり、涙を拭いたりするのに使う、といったように考えるだろうが、英語話者には、鼻をかむためのもの、といった認識がなされていることが分かるのである。確かに以前電車で、欧米から来たであろう外国人がハンカチで鼻をかんでいるのを見かけたことがあり、その際に、日本だとティッシュを使うのになあ、と思った記憶がある。

同様の記述は別の英英辞典でも確認される。

- (16) handkerchief: a small piece of material or paper that you use for blowing your nose, etc. (OALD<sup>9</sup>)

やはり、鼻をかむために用いる物として定義されている。日本語のハンカチと英語のhandkerchiefは、指す対象それ自体は同じであるものの、文化的観点からは相違が認められるわけである。日本語の「ハンカチ」に関してその定義を考えた場合、鼻をかむ、といった用途は少なくとも第一義的ではないであろう。

次にdrive-throughを挙げてみる。この語もhandkerchiefと同様、「ドライブスルー」として日本語に定着しており、学生にとっても馴染み深い語であろう。英英辞典で引いてみるとその定義は以下のように記されている。

- (17) drive-through: a restaurant, bank etc that serves you through a special window so you do not have to leave your car (MED<sup>2</sup>)

おそらく学生はdrive-throughといえば、「ああ、ドライブスルーか。ハンバーガーチェーンとかの」といった感じでイメージするであろう。しかしながら英英辞典での定義を見てみると、bankという語があることに気づく。「銀行」である。「ドライブスルー」について、定義中のrestaurantは分かるが、bankについては、「えっ、ドライブスルーの銀行？」と学生は思うのではないだろうか。そうなのである。日本では見かけないように思うが、英米では外食産業のみならず、銀行にもドライブスルー形式のものがあるのである。<sup>2</sup> これを取っ掛かりに、当語についてインターネットで検索してみると、drive-through pharmacyというものもあることが分かる。ちなみになんと、drive-through weddingというものも確認される。<sup>3</sup>

もう1つ、最後の例としてsouvenirを挙げてみる。souvenirの意味は何か—学生に聞いてみると、その大半はおそらく「おみやげ」と答えるであろう。確かにみやげ屋の店先にsouvenirやsouvenir shopといった表示もよく見かけることから、これで問題ないように思われる。しかしながら、souvenirの意味は日本語の「おみやげ」とまったく同じ、というわけではないことが英英辞典の記述から分かるのである。

では、souvenirとはどのような意味であるのか。英英辞典でその定義を確認してみる。

- (18) souvenir: an object that you buy or keep to remind yourself of a special occasion or a place you have visited (LDOCE<sup>6</sup>)

概略、ある出来事などを忘れないように買ったり持っておいたりするもの、といった内容であり、さっと読むと、日本語の「おみやげ」と同じではないか、という印象を抱かれるかもしれない。しかしながら、定義の後半部分に着目してい

ただきたい。to remind yourself of a special occasion...、すなわち、ある出来事などを自分自身が覚えておくために、とある。souvenirとは、それを買い求めるなどする自分自身のためのものである、ということが分かるのである。

以下は別の英英辞典における定義であるが、やはりsouvenirは自分自身のためのものである、と考えてよいであろう。

- (19) souvenir: something that is kept as a reminder of a place you have visited, an event you have been to, etc. (MWALD)

以上により、souvenirとはいわば、自分自身のための記念品、といった意の語として捉えられるわけである。

このような意味合いをもつ英語のsouvenirに対し、日本語の「おみやげ」といえば、自分のためのものではなく、家族、また知人などといった第三者のために買い求めるなどするもの、といった意味で用いられると思われるが、どうであろうか。

「おみやげ」とは誰のためのものであるか。国語辞典で「みやげ」を引いてみると、次のような記述が確認される。

- (20) 旅先で求め帰り人に贈る、その土地の産物（『広辞苑7』）

自分自身のためではなく、他者のためのものであることが分かる。

別の国語辞典で確認してみても、「みやげ」とは家族などに向けたものであり、やはり自分自身のためのものではないことが分かる。

- (21) 旅行先や外出先から家などへ持って帰るその土地の産物（『大辞林3』）

以上、英語のsouvenirが自分のためのものであるのに対し、日本語の「おみやげ」は他の人のためのものである一両語にはこのような相違が確認されるわけで



あるが、しかしながら実のところ、souvenirについては英英辞典において以下のような定義も確認される。

- (22) souvenir: a thing that you buy and/or keep to remind yourself of a place, an occasion, or a holiday/vacation; something that you bring back for other people when you have been on holiday/vacation (OALD<sup>9</sup>)

定義後半部分、すなわちセミコロン以下については、日本語の「おみやげ」と意味的に同一と捉えられるであろう。とはいえ、定義前半部分については(18)および(19)と内容的に同一であり、よってsouvenirについては、やはり第一義的には、自分自身のためのものを意味するものと理解してよいのではないだろうか。

以上、日本語の「おみやげ」が他者のためのものを意味するのに対し、英語のsouvenirは基本的に自分のためのものを意味する—このような差異が確認されるわけである。

## 5. おわりに

本稿では、英英辞典—特に英語学習者向け英英辞典—を活用した英語学習指導について、語彙力の増強ならびに英語語彙のもつ文化的側面の学習を主眼に、その具体的方法を提示、英英辞典の英語学習ツールとしての有用性を示した。今日、携帯式電子辞書はもとより、スマートフォンなどの飛躍的な普及により、学生は従前に比べ英英辞典を手軽に利用することが可能な環境にある。本稿で示した英語学習指導のあり方は、学生の気づき、および学習への動機づけを高めることにより学習効果を向上させるものであり、学生の英語学習においてきわめて効果的であると言えるであろう。

## 注

1. 電子辞書では、定義中の語を選択し、その語の意味へとジャンプできるようになっている。瞬時に別の見出し語を参照することができ、非常に便利である。なお、英

語学習における、電子辞書、その他英語辞典の活用法について、関山（2007）、磐崎（2011）では、豊富な具体例とともにその有用性が示されている。また、英語辞典を使いこなす上で、樋口（2012）も大変有益である。

2. ドライブスルーのATMも見受けられる。窓口サービスにせよATMにせよ、銀行のドライブスルー形式のものを筆者は日本では見かけたことがないが、実は日本でも大垣共立銀行が「ドライブスルーATM」を設置しているらしい (<https://www.okb.co.jp/all/atm.html>; 2019年4月13日アクセス)。
3. drive-through pharmacyについては、例えば以下のサイトで確認される: <https://www.dailymail.co.uk/health/article-1047196/Boots-opens-Britains-drive-chemist-old-McDonalds.html> (2019年4月13日アクセス)。また同様に、drive-through weddingについても以下のサイトで確認される: <https://www.overseasattractions.com/blog/page/6/> (2019年4月13日アクセス)。これは、新郎と新婦がチャペルの窓口に車を横付けし、窓口越しに牧師が儀式を執り行うというサービスである。

## 参考文献

磐崎弘貞（2011）『英語辞書をフル活用する7つの鉄則』大修館書店。

関山健治（2007）『辞書からはじめる英語学習』小学館。

樋口昌幸（2012）『英語辞典活用ガイド』開拓社。

## 辞書および略称

CCAD: Collins Cobuild Advanced Dictionary of English. 2009. Boston: Heinle Cengage Learning.

CED<sup>9</sup>: Collins English Dictionary 9th ed. 2007. Glasgow: HarperCollins Publishers.

『大辞林3』: 『大辞林第3版』2006. 東京: 三省堂。

『広辞苑7』: 『広辞苑第7版』2018. 東京: 岩波書店。

LDOCE<sup>6</sup>: Longman Dictionary of Contemporary English 6th ed. 2014. Harlow: Pearson Education Limited.

MED<sup>2</sup>: Macmillan English Dictionary for Advanced Learners 2nd ed. 2007. Oxford: Macmillan Education.

MWALD: Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary. 2017. Springfield: Merriam-Webster.

NOAD<sup>2</sup>: The New Oxford American Dictionary, 2nd ed. 2005. New York: Oxford University Press.

OALD<sup>9</sup>: Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English 9th ed. 2015. Oxford: Oxford University Press.

ODE<sup>2</sup>, Revised: Oxford Dictionary of English 2nd ed., revised. 2005. Oxford: Oxford University Press.

『ウイズダム英和4』: 『ウイズダム英和辞典第4版』 2019. 東京: 三省堂.